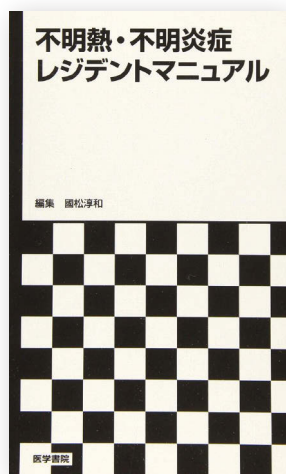




通読後も折に触れて読んで 使い倒していくべき本

評者 萩野 昇 帝京大ちば総合医療センター第三内科学講座講師〔血液・リウマチ〕



不明熱・不明炎症 レジデントマニュアル

国松淳和=編

定価：本体 4,500 円＋税
B6 変型・498 頁／医学書院／2020
[ISBN978-4-260-04201-7]

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の波が世界を押し流している。まさしく「パンデミック」の風景であるが、このパンデミックは各社会が内包する脆弱性を片端から明らかにしつつある。わが国の診療現場においても、少なからぬ数の「システムエラー」が明白になったが、その 1 つに「日常診療において『発熱患者』に対してどのようにワークアップすればよいのか、きちんと理解して診療している医師は決して多くない」という不都合な事実がある。卒前の医学教育において、疾患ごと・臓器ごとの縦割りの教育を受け (そのメリットが幾分か存在することは、旧世代の医学教育を受けた者としては、いちおう留保をつけておきたいところではあるが)、卒後の臨床現場では多くは on-the-job training の形で、教える側の医師の専門性に大きく偏った教育が施される現状であれば、今後もしばらくは慣性的に現状が維持されるのではないかと悲観せざるをえない。

そのような状況で出版された本書は、「遷延する発熱＝不明熱」ならびに「不明炎症」という、非常にありふれていながらぞんざいな扱いを受けてきた症候に対して、多くの分野の専門家が寄稿する形でまとめられた 1 冊であり、まさに “with COVID-19” の一著としてふさわしい内容である。編者の国松淳和先生 (p.129) はすでに類似テーマで『外来で診る不明熱—Dr. K の発熱カレンダーでよくわかる不明熱のミカタ』(中山書店、2017)、『「これって自己炎症性疾患?」と思ったら—疑い、捉え、実践する』(金芳堂、2018) などのスマッシュヒットを飛ばしておられるが、今回のレジデントマニュアルは過去の単著よりもやや基本的なレベルに読者対象を絞っており、「レジデント」が踏まえておくべき内容として適切と思われる。一方で、「コアな国松ファン」にとっては、やや食い足りない感じも否めないが、そういう読者に向けては国松節全開の 10 章「とにかく全然わからないとき」、付章「こっそり読みたい『不明熱マニュアル外伝』」が準備されている。ただし、付章については「コアな国松ファン」は立ち入り禁止の札が立っているので、そういう意味でも「こっそり読みたい」。

章立てとして「検査 (4 章)」「疾患 (5・7・9 章)」「症候 (6・8 章)」と分けられているのも素晴らしい。疾患・症候がわざわざ 2 群に分けられていることから、最初から稀な事象を考えるべきではなく、同時に稀な事象を見落としてはならない、という編者のニッチな切り口がうかがえる。言い換えると、5 章から 9 章に至るまでの流れには「病名がなくてもできること」があるだろうという編者の思想をバックグラウンドとして見てとることができる。

「コアな国松ファン」であると同時に「不明熱・不明炎症屋」の端くれとして、自分ならどう書くだろう、と考えた時、「状況による分類」をもう少し前面に打ち出すのではないかと、思った。つまり、本書では「渡航関連感染症」のみ「状況」が明記されているが、それ以外にも「高齢者・超高齢者」や「透析患者」「がん患者」という切り口があってもよい。第 2 版以降に期待したい。

総括すると、本書はレジデントマニュアルシリーズの他書と同様、1 回軽く通読して「脳内に OS をインストール」し、折に触れて (不明熱・不明炎症の患者を診療するたびに) 該当部分を読んで使い倒していくべき本である。お手元になれることを強くお勧めしたい。

